参考資料２

第４次地域福祉計画策定に係る「検討チーム A」検討会まとめ「市民参加による行政・専門職との協働活動の充実」

～公民協働のアイデアを具体的な活動へつなぐことや，地域住民の活動をネットワークでつなぎ・広がる地域づくりを考えます～

福祉学習

現状（問題点）に関する意見

・手話を学びたい需要に対し，学べる場が少ない。
・手話学習をしても，実践できる場が少ない。
・年によって福祉学習を実施している学校としていない学校があり，学習の機会が均等ではない。

取組の提案

①「手話」を福祉学習のきっかけとする。
　小さい時から「この町がすき」の歌を手話で覚える，イベント時に手話を披露
②小中学校による高齢者施設等への訪問，交流
③障がいのある人の取組や頑張りなどを見て知って，理解を深める取組
④ベルマークやリングプル集めなど，簡単に協力できることから福祉に参加
⑤福祉ポイント制度（今の健康ポイントに近いイメージ）
　福祉学習を受けて楽しく学んでポイントを貯める仕組み
⑥フードドライブの缶詰の行き先を追い，動画等で仕組みを知ってもらう取組
⑦福祉をテーマにした映画会
⑧高齢者生活支援センター職員による講演（地域の課題）

【社協より】
・手話講座受講のニーズに応えるよう，機会を確保する取組をしていきたい。

情報発信／周知・啓発

現状（問題点）に関する意見

・地域活動者等に対し，専門職自身の周知ができていない。
・ボランティアの潜在人口は多いが，うまく広告・宣伝ができていない。
・情報が必要な人に，必要な情報を届けることができていない。

取組の提案

①支援が必要な人を支援するために，専門職自身の周知活動が必要
②ボランティアについての広報・宣伝の仕方を検討する。
③高校生が講師となって実施しているスマホ講座に協力してくれる人を巻き込み，活動を続けて行けたらと思う。

地域コミュニティ

現状（問題点）に関する意見

・専門職による，地域住民を巻き込んだ地域づくりができていない。
・各自治会活動に差があり，地域内でつながりがないところがある。
・活動の担い手不足に加え，参加者・担い手ともメンバーが固定化
・相手も遠慮をしてしまい，隣人であってもうまく関われない。
・近所の方の顔を知らず，いざという時お互いに助け合えない。
・子どもと高齢者が一緒に集まれる場所や，近所に居場所がない。
・小学校や幼稚園などの空きスペースを，居場所に利用できない。
・体操教室など声を掛けても，男性の参加が少ない。
・コロナの影響で交流のきっかけである祭りが開催できない。
・つながりづくりのために，地域包括ケアシステムを活用できていない。

取組の提案

①専門職が地域の祭りに参加してつながりづくりの取組を進めたり，ZOOM の使い方等を市民にレクチャーしたりする。
②地域と交流がしたいといって活動を始めている教会などの輪を広げていく。
③普段からの声かけによるつながりづくり（例：1 日 5 人と話をし，週に 2 回は外出をし，友達を 10 人作りましょうという取組）
④子どもの時からあいさつを習慣化する取組
⑤ゴミのお世話を通して地域住民とのつながりが生まれる。
⑥10 世帯の単位のコミュニティを組織し，町内会や自治会が音頭を取るような交流会
⑦横のつながりがない状況を脱するために，自身ができることをしていくことで，地域の支えとなる。

今後　これがしたい

教育委員会・学校へのアプローチ
●福祉学習のメニューを小中学校に提案し，色々な福祉学習の形があることを学校側に知ってもらうことが，児童生徒への福祉の啓発につながる
●手話をきっかけに幼少期から福祉に触れてほしい（手話歌など）
●リングプルやペットボトルキャップ回収等の呼びかけ

福祉学習ポイント
●福祉学習の受講，活動の体験でポイントがもらえる制度を創設
手軽に取り組める工夫により，今まで参画していなかった人の活動のきっかけとする

→ みんなが思いやり「お互いさま」の理解を広げる

地域支え合い推進員の役割・活動の啓発
●地域の集まりに参加し，顔の見えるコーディネーターを目指す
●つながりにくい人へ，専門職の立場から直接情報を届ける

スマホ講座に参加してくれる高校生やサポーターを拡大する（ZOOM の使い方講座なども）
●シニア世代が SNS でコミュニケーションが取れるようになる
●SNS を利用して情報を取得，発信できる人を増やす
●スマホ講座のスペースがコミュニケーションの場にもなる
●離れていても SNS を通じてつながる人が多くなる
●スマホ講座を通して，高校生や大学生やサポーターがしたいことで活躍できる場となる
●少人数グループでスマホ講座をし，コミュニティの輪を広げる

→ 多様なつながりの形を広げる

近所に居場所をつくりたい
●近所＝小学校区に 1 か所を目指す（いつでも，どこでも）
●場所や資金の確保のため，行政や社協の後押しが必要
●居場所バンクの設立
●プラスワン事業の実施

ＮＥＷご近所づきあいの検討
●10 世帯単位のモデル地区を決め，顔合わせから実践してみる
リーダー的役割の市民に加え，自治会長や民生委員も参画

→ このまちで心地よく暮らす

包括的相談支援

現状（問題点）に関する意見

・80 歳を超えた人とちと介護の専門職をつなげる仕組みがない。
・老老介護の相談をする組織がない。
・介護の悩みを相談できたり，お互いの情報交換ができたり，若くて介護している人たちの悩みを聞く場所がない。

取組の提案

①気軽に相談でき，よろず相談所のような機能を持った活動の場所，居場所ができればいい。

認知症に関する施策

現状（問題点）に関する意見

・高齢者が更に増える今後に向けた土壌作りができていない。
・地域の中で支援が必要になってくる方に対する意識の形成が図れていない。
・軽度の認知症の方は多くの支援を必要としていなくても，仕事等の役割がなくなってしまうなど，つながりや居場所がなくなっていくことにつながる。
・認知所サポーター養成講座受講後，認知所の方と実際に交流する機会がなく，学びが活かされない。

取組の提案

①認知症サポーター養成講座修了者が活動を気軽に相談できる，よろず相談所のような活動の場所・居場所の創設や，軽度の認知症の方との交流会を開催する。
【社協より】
・一般向けの認知症サポーター養成講座を，今後自治会や企業等へ出向き理解を広げるようにする。
・認知症サポーターとして，実践での活動者を増やしていくことを浸透させていく。
・認知症サポーター養成講座受講後の活動については，あじさいの会と社会福協議会とで一緒に解決に向けて取り組んでいけないか。

災害時支援

現状（問題点）に関する意見

・自主防災組織等の温度差があり，活動できていない地域がある。
・防災訓練が有事の際に行動できるような充実した内容ではない地域がある。
・地域の関係機関同士で連携が少ない。
・ケアマネージャーと民生委員とがつながっていないことが多い。
・日ごろからの関係性がなく，いざという時に声掛けが出来ない。
・防災は防災，福祉は福祉のような縦割りで，地区防災計画が立案できない。

取組の提案

①防災カフェといった５～１０軒程度で集まってお茶を飲むといった機会を確保
②仮設住宅でも集会室などを設け，普段から集まり孤独死を防ぐ。
③地域支え合い推進員の立場から，在宅避難等の情報提供
④地域の人と専門職が共に防災倉庫の中の物の使い方を確認したり，行政が地域の祭りへ顔を出したりすることが必要
⑤防災意識の低い人へ，地域の専門職が災害時の避難計画について伝える。
⑥市や社会福祉協議会が正しい災害情報を把握し，いち早く発信することが必要
⑦あしや防災ネットに家族の方が登録・防災情報を入手し，家族から本人に情報を伝達する方法を広く伝える。
⑧実際に災害を体験していない世代，職員へも，経験を語り継いでいく。

協働と参加支援

現状（問題点）に関する意見

・特に意見なし

取組の提案

①専門家が入ると事業や取組が長続きするため，活動の場に顔を出すこと。
②福祉以外に，スポーツや文化など多様な専門職が地域にいるはずなので，その専門職との協働や「こえる場！」の取組などを考えてはどうか。

今後　これがしたい

認知症サポーターへのアプローチ
- 実践に向けたスキルアップ
  どんな活動をどのように実践していくか，サポーター，当事者，専門職も交えて検討する
- 認知症サポーターへのアンケート
  今後の活動の可能性や精神的な負担の有無等を探る

認知症サポーターの啓発
- オレンジリングに代わるグッズを検討，考案，作成するチームを結成し活動の輪と認知症サポーターの輪を広げる
- 見守りネット事業に参画している企業への働きかけ
- 認知症サポーター養成講座の拡充
  自治会や企業へ出向き，理解を広げるようアプローチ

災害の情報を届ける
- 防災リーフレット（いのちまもる）の改訂
  自主防災会，高校生，地元小中学生など多くの参加を目指す
- 外国人など情報が伝わりにくい人へのアプローチ
- 専門職から情報の入手が難しい人へのアプローチ
  避難計画作成の促進や在宅非難の情報等を提供する
- あしや防災ネットへの登録（家族の登録を含む）の促進

災害時に誰も取り残さない地域づくり
- 多くの人が楽しく参加できる防災訓練の工夫と充実
- 個別避難支援計画作成等の啓発
- 自主防災会等の地域支援者に対する啓発
- 緊急・災害時要援護者台帳等の運用の見直し

つながれる仕組みづくり
- 専門職は，住民に顔を覚えてもらえるよう地域活動の場に出向く
- 既存の「こえる場！」など，互いが出会える機会を設ける
- 身近に感じられるよう見守りネット事業参画事業者にアプローチ
- 既に関係のある専門職や住民同士で情報共有ができる仕組み

高校生・大学生とのつながり・協働の充実
- 今のつながりを更に拡充する

超高齢社会に備える

誰もが安心・安全に暮らせるように支える

みんなでまちづくりを進める

検討チームB（生活困窮＋権利擁護）検討内容まとめ

現状・課題

・各支援機関の連携状況について，同じ建物内での連携はできているが，場所が離れると情報提供で終わる時があり，きちんとつながっていないケースがある。（保健福祉センター⇔市役所など）
・対象者像に応じた社会参加の場の創設ができていない。
・関わりが困難（支援，介入拒否等）な対象者への支援に苦慮している。
・若年性認知症に関する施策が薄い（対象者の就労支援や，相談先，情報，啓発など）。
・外国籍の方からの相談について，言語の課題から適切な支援や情報提供ができてきないと感じるケースがある。
・支援者によって支援のバラつきがないよう，支援者のスキルアップや人材育成が必要である。

目標

総合相談・包括的支援体制の強化（みんなで相談を受ける仕組み）

1 各機関の連携による総合相談支援体制の構築

・属性を問わず初回相談を受ける。
・他機関へつなぐ必要があるケースは，相談時に関係機関へつなぐ（オンラインツールの活用・支援員が対象者のいる窓口へ出向く）。
・対人援助等に関する研修の継続実施
・相談スキルアップ研修の位置づけで，保健福祉センター総合相談窓口に各機関の職員を日替わりで配置する。
・対応事例の記録を積み上げ，支援員間で共有
・立地が離れている関係機関とも顔見知りの関係を構築し，双方で相談しやすい環境を作る。

2 生活困窮者支援の充実

・ひとり一役活動として，外国語の通訳を募集し，外国籍の方にもきめ細かい支援を可能にする。
・親族，知人がおらず孤立している，母子・父子家庭や，生活困窮者は，支援漏れがないよう他機関で情報共有し，連携を取りながら支援を行う。

3 身近な地域での相談・見守り

・民生委員・児童委員が実施している地域の見守り活動と専門職が連携して世帯支援を行う。
・身寄りのない方と顔見知りの関係を構築
・支援介入が難しい方に対する地域での見守り活動として，支援まで至らずとも状況把握はしておけるような仕組みづくりを行う。

4 社会参加の場の創出

・就労していない等，社会から孤立している人の居場所づくり（社会的役割を持てるような場）
・障がいのある方や若年性認知症の方，地域との関係が希薄な高齢者の居場所づくり
・生活支援体制整備との協働

5 権利擁護支援の充実

・あじさいの会と適宜情報交換を行い，市民にとって有益な情報の発信へつなげる。
・高齢・障がい・包括・困窮等で若年性認知症のケース会議を持ち，支援のネットワークづくりを行う。
・民生委員・児童委員以外で，地域の支援者を増やす。

検討チームⒷ（生活支援体制整備）検討内容まとめ

現状・課題

- 地域の課題を話し合う協議体が上手く機能しておらず，専門職と地域活動者がつくっていきたい具体的な目指す地域像のイメージが共有できていない。目標は具体的であることが望ましい。
- 地域支え合い推進員（生活支援コーディネーター）の役割が地区福祉委員会等で，あまり認識されていない。
- 地区福祉委員会では，地区の困りごと等について話し合うことが十分にできていない。
- 地域で動いていくためには，自治会との継続的な協力関係が必要だが，十分にできていない。
- 小地域福祉ブロック会議について，実施はしているが，内容が具体的でないと後につながりにくい。

目標：専門職と地域の協働による福祉のまちづくり

①生活支援体制整備事業と社会福祉協議会における地域活動の統合	②自治会と民生委員等，地域活動者が連動できるような仕組みの開発	③地域発信型ネットワークの仕組みの再検討
• 高齢者生活支援センター，社会福祉協議会地域福祉係，地域支え合い推進員で圏域ごとの地域課題を共有する等，専門職の協働を進める。 • 地区福祉委員会等において，地域の困りごと等が話し合われる場になるように，地域支え合い推進員が主体的に参画する。	• 小地域福祉ブロック会議のようなプラットホームの仕組みづくりを，自治会等の現状把握を進めながら検討する。	• 小地域福祉ブロック会議等の各会議体の連動や運営方法について再検討する。

【メンバー】
地域福祉部会　東郷委員
芦屋市社会福祉協議会　針山氏，小阪氏
地域福祉課　吉川，阪口

「多様な主体の参加につながるまちづくりの仕組み」 ＜題材＞ ●「こえる場！」との協働 ●つながる居場所づくり ●参加型のしごとづくり
地域活動を行っている企業・団体等の多様な分野の人や地域と関わる人の参加を増やし，つながりの再発見と創出を考えます

区分	問題点	主な意見
情報発信 周知・啓発	・欲しい情報，必要な情報が届けられていない ・点を面にする仕組みができていない ・「場」の大切さは，福祉に携わっている人や「場」から何かが生み出される体感がある人以外には伝わりにくい ・高齢者は SNS 等の使用には不慣れで不安がある	①情報をどうつなげ，どう拡散するかが重要 ②やはり口伝えや紙伝えが一番強いのでは ③対象者を絞り，世代に合った方法で情報発信が必要 ④支援の成功事例を積み上げ，情報共有することが大事 ⑤活動のプロセスや結果報告は次のステップにつながる ⑥高校生は駅の掲示物や学校の掲示板は見る ⑦高校生はインスタや LINE をよく使っている ⑧興味のない人に広げるには，自分たちよりも，自分たちのファンの人が広げてくれたら広がる ⑨継続して発信することが大切
地域コミュニティ	・地域活動を推進する人材の不足 ・地域・世代間に地域福祉活動に対する温度差がある ・地域活動者間でも互いの活動内容を知らない ・隣近所のつきあいが少ない ・マンションの孤立化と問題の潜在化	①若い人，働き盛りの大人，高齢者に共通するテーマは？ ②今後支援が必要となる前に予防的な観点で働きかけたい ③声をかけあえる関係づくりが必要 ④対象者やテーマを絞れば集まりやすい ⑤「健康」というテーマはみんなの関心が集まりやすい
協働と参加支援	＜資源＞ ・活動場所が少ない ・「人」「モノ」「金」が揃っていることは少ない	①障がい者に手伝って欲しいと声がかかるようにしたい ②人や物を発掘していく仕組みができればよい ③「使いたい」と「貸せる」を上手にマッチさせたい ④ないものがあれば作ろうという発想 ⑤できないことや手伝って欲しいことを発信すれば，協力してくれる人はいる ⑥自分のできることを発信することで，「助けて欲しい」の声を上げやすくなる
	＜学生＞ ・地域活動に中・高校生の参加が少ない ・地域の取組や情報が届いていない ・高校生が身近に思えるテーマでないと行動するきっかけがつかめない	⑦地域福祉に触れるきかっけを提供できればよい ⑧学生が社会とのつながりを学ぶ場が必要 ⑨市内の教育関係者とつながる仕組みがつくれないか ⑩高齢者との ZOOM 交流会の企画・開催や芦屋のお店の CM 制作を行っている ⑪高校生は忙しい。家からでも参加できるなど“手軽さ”があれば参加しやすい ⑫他高や同世代と交流できるのであれば行ってみようと思う ⑬高校生が得意なことをやってもらったらどうか ⑭「地域のイベントに参加してみた」「防災訓練でこんなことを体験した」を拡散してほしい
	＜企業等＞ ・「こえる場！」の周知不足 ・企業との協働は継続が難しい ・企業から何らかの協力をしたいとの働きかけがあるが，市側に具体的なアイデアがないため結びついていない。	⑮地域にある資源，企業，団体がまちづくりにどう関わっていけるか ⑯スーパーや銀行，災害の避難所のように既にできている関係性を拡充していければよいのではないか ⑰コミュニティビジネスを普及させたい
	＜居場所・しごと＞ ・自分から動き出せない人へのアプローチは困難 ・社会とつながることが難しい人の働き場所が少ない	⑱社会とつながることが難しい人が，多様な働き方ができるよう色々な受皿があればよい ⑲自分から動き出せない人が，次のアクションを起こすきっかけづくりが必要

今後取り組んでいくこと	具体的な取組アイデア
<u>伝わる・広げる情報共有の仕組みづくり</u> ▷多様な人が関わり発信力を高める ・（手段）情報発信ツールの研究，動画を使ったわかりやすい配信，拡散させる方法の検討 ・（内容）成功事例のプロセス，地域活動，資源，取組の成果 ・学校園，活動団体，企業等多様な組織・ネットワークへの情報提供 ・情報の拡散や協力してくれる人（地域サポーター）を増やす ・継続して発信する仕組みづくり ▷みんながＩＣＴを使えるようになる	・「〇〇やってみた」動画の配信 企画からいろいろな人に参加してもらいプロセスや活動・仕組みをわかりやすく手軽に発信する ・当事者や実際に関わった人からの発信 ・地域活動に参加した人からの情報拡散 ・広報紙で地域福祉に関する記事を連載する
<u>地域福祉を推進する人を増やす</u> ▷リーダーとなりうる人を探す・増やす ・成功事例のプロセスを伝える ・多様な人が参加して成功事例の情報共有や学習する機会づくり ・活動者をフォローできる体制づくり ・専門職の地域づくりの意識醸成	・お寺や教会などの集会所以外の使える場所が周知できる取組 ・チーム（10 人程度）でゴミ出し支援
<u>困りごとを発信し協働できるつながりづくり</u> 「ちょっと手伝って」を投げかけやすい環境整備 ▷既存のネットワークを充実し，つなぐ ▷ひとり一役ワーカーを増やす ・できることで参加し，助けられ上手になる ▷高校生や大学生との協働 ・高校や大学とのつながりづくり ・高校生や大学生が参加できる場の提供 ▷教育委員会との協働 ▷「こえる場！」とつながる仕組みづくり ・地域の困りごとと参画企業等をつなげられる仕組み ・市内の高校，芦屋市身体障害者福祉協会，包括連携協定の企業等に「こえる場！」に参画してもらう	・資源（人・モノ・金）を発掘・マッチングするしくみ（芦屋市版ポータル的なものがあればよい） ・移動販売車を形のない居場所に ・「ちょっとしたできること」でひとり一役ワーカー登録 ・高校生による「地域のイベントに参加してみた」「防災訓練での体験」の PR ・学校へ機会を捉えて継続した情報発信するオリエンテーション，学祭，広報あしや配布 ・既につながっている企業等に何ができるかヒアリングしてあたっていく ・スーパーのフードコードの空時間帯の活用
<u>新たなプログラムづくり</u> ・社協の取組（「働けない」をこえる社会へ！）を踏まえて継続して検討していく ・交流の場を活用したしごとづくり	・手提げかばんの作成や名付けなど小学校入学準備のビジネス化 ・芦屋の企業と組んでブランド化 ・施設等の高齢者が作成している編み物等をお披露目，販売できる集いの開催